

ビクタス®S MTクリーム 症例報告

腸球菌の関与が疑われた外耳炎の1例

大阪府 A動物病院



はじめに

犬の外耳炎には、複数の原因菌が関与していることがあり、エンピリックセラピーが奏功しない場合も多い。エンピリックセラピーの際には、起因菌がどの抗菌薬に感受性があるのかを把握しておくことも重要である。今回は、フラジオマイシン含有軟膏*からビクタス®S MTクリームに変更したことによって治療が奏功した症例を報告する。

(*:成分;硫酸フラジオマイシン、チオストレプトン、ナイスタチン、トリアムシノロンアセトニド)

プロフィールおよび主訴

品 種：チワワ

性 別：雌

年 齢：9歳

主 訴：

数日前から外耳道より滲出液が出ており、左耳を頻繁に掻くようになり、耳垢も増加していた。



症例の写真

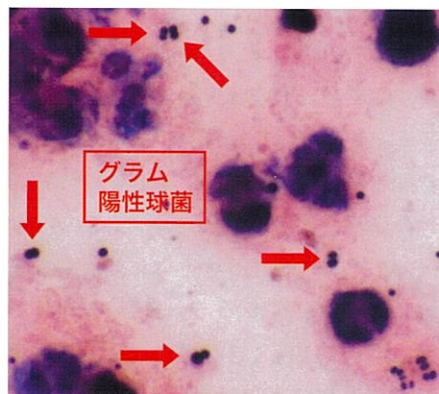


写真1 外耳滲出液の顕微鏡写真
(第7病日:グラム染色)

治療および治療経過

初診(第1病日)

痒みと滲出液を抑えるために、フラジオマイシン含有軟膏を1日1回、適量を6日間(第1病日～第6病日)連続投与した。

第7病日

臨床症状に改善が見られなかった(写真2)ので、耳垢を採取・グラム染色を実施して顕微鏡検査を行った。その結果、マラセチアはほとんど見られなかったが、二菌が連鎖しているグラム陽性球菌(顕微鏡写真の矢印)が認められたため(写真1)、腸球菌の関与を疑い、感受性のあるビクタスS MTクリーム 6g ポトルを、1日1回、適量を7日間(第7病日～第13病日)投与することにした。

第13病日

外耳道の滲出液が見られなくなり、外耳道が乾燥し、明らかな改善傾向が確認された(写真3)。また、飼い主様の稟告でも、ここ数日痒みがおさまっているとのことだったので、以後経過観察とした。

表1 臨床所見スコアの推移

	第1病日	第7病日	第13病日
	F含有軟膏** 投与開始	ビクタスクリーム投与開始	ビクタスクリーム最終投与
外耳道の滲出液	++	++	-
耳の痒み	++	++	-

**：フラジオマイシン含有軟膏



外耳道所見：
臭いがして
滲出液を認める。

写真2 外耳道の写真(第7病日)



外耳道所見：
乾燥している。

写真3 外耳道の写真(第13病日)

考察

外耳炎の原因菌には、多くの細菌が挙げられている(表2)。

外耳炎由来菌の分離頻度から考えると、検出率の高い緑膿菌やマラセチア、ブドウ球菌に感受性がある薬剤を選択することが妥当と考え、今回はこれらに抗菌力を示すフラジオマイシン含有軟膏を使用した。

投与開始後6日間経過しても期待した効果が得られなかったため、耳垢細胞診を行ったところ、二菌が連鎖しているグラム陽性球菌(写真1)が多数認められた。このため、原因菌として腸球菌を疑い本菌に有効なオルピフロキサシンを含有するビクタス®S MTクリーム 6g ボトルに治療薬を変更した。

初診時に耳垢細胞診(グラム染色)を実施できれば球・桿菌の確認や菌のかたまり方などを確認することができるが、様々な要因によって実施できないこともある。今回は再診日を1週間後に設定していたので、臨床症状の確認と耳垢細胞診(グラム染色)の実施にて腸球菌を疑うことができた。エンピリックセラピーを実施する際には、治療効果を確認するため、1週間後に再診日を設定することが望ましいと考えられた。

表2 外耳炎由来菌におけるアンチバイオグラム(調査期間:2021年1月~12月)

順位	菌名	グラム染色・形状	菌株数	検出率	アモキシシリン	アモキシシリン/クラヴァン酸	セフトラキソン	セフトリアキソン	セフトキシム	オキシテトラサイクリン	ゲンタマイシン	エリスロマイシン	ミノサイクリン	ドキシサイクリン	スルファメトキサゾール/トリメトプリム	ネリスチン	イミダゾリド	クロラムフェニコール
					ペニシリン系	アモキシシリン/クラヴァン酸	セフトラキソン系(第一世代)	セフトリアキソン系(第二世代)	セフトキシム系(第三世代)	オキシテトラサイクリン系	ゲンタマイシン系	エリスロマイシン系	ミノサイクリン系	ドキシサイクリン系	ST合剤	(-)	イミダゾリド系	クロラムフェニコール系
1	<i>Pseudomonas aeruginosa</i> (緑膿菌)	陰性桿菌	226	22.0%	0%	0%	0%	0%	0%	75.0%	63.7%	0%	0%	0%	0%	8.0%	91.6%	0%
2	<i>Malassezia sp.</i> (マラセチア真菌)	真菌	203	19.8%	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT
3	<i>Staphylococcus schleiferi</i> (ブドウ球菌:メチシリン感受性)	陽性球菌	172	16.7%	84.9%	100%	100%	100%	100%	36.0%	91.9%	98.3%	100%	100%	98.3%	92.4%	100%	98.8%
4	Group G Streptococcus (連鎖球菌)	陽性球菌	153	14.9%	100%	100%	100%	100%	100%	53.6%	0%	69.3%	51.6%	54.2%	100%	86.9%	100%	98.0%
5	<i>Staphylococcus pseudintermedius</i> (ブドウ球菌:メチシリン感受性)	陽性球菌	138	13.4%	15.9%	100%	100%	100%	100%	62.3%	58.7%	47.8%	100%	100%	55.8%	89.1%	100%	47.1%
6	<i>Staphylococcus pseudintermedius</i> (ブドウ球菌:メチシリン耐性)	陽性球菌	118	11.5%	0%	0%	0%	0%	0%	5.1%	5.9%	9.3%	79.7%	78.8%	29.7%	81.4%	0%	16.1%
7	<i>Proteus mirabilis</i>	陰性桿菌	117	11.4%	80.3%	96.6%	97.4%	100%	100%	96.6%	95.7%	0%	0%	0%	76.9%	46.2%	100%	67.5%
8	<i>Enterococcus faecalis</i> (腸球菌)	陽性球菌	94	9.2%	100%	100%	0%	0%	0%	91.5%	0%	27.7%	37.2%	41.5%	0%	72.3%	100%	77.7%
9	<i>Staphylococcus schleiferi</i> (ブドウ球菌:メチシリン耐性)	陽性球菌	70	6.8%	0%	0%	0%	0%	0%	22.9%	57.1%	91.4%	97.1%	100%	98.6%	84.3%	0%	94.3%
10	<i>Escherichia coli</i> (大腸菌)	陰性桿菌	68	6.6%	73.5%	85.3%	86.8%	94.1%	92.6%	75.0%	91.2%	0%	98.5%	100%	91.2%	100%	100%	88.2%

*:数値は感受性株分離頻度

注1:二次診療動物病院から送られた検体は除いて集計した。注2:Corynebacterium sp.は、疾病との関連が明確でなかったため除いて集計した。

感受性率 75%以上(高感受性菌)

感受性率 25%未満(低感受性菌または自然耐性菌)

(提供:株式会社サンリツセルコバ検査センター 露木勇三)